

いぬる。ちよございな人の得うかまずに居るのを見さらして小便さす物か。いなれるなら、いんで見され。△申、此幽霊はごりがんでござります。○ごりがんでも六里がんでかまやせん。おれの足でおれがいぬる。△此とき下口／＼にかゝるを、ゆうれいまねき引もどす。○ヨウ／＼コリヤどふじや。△なんと奇妙でござりませふがな。○なんで幽霊が腹を立てるのじや。コリヤ幽霊の腹立にあふたのか。□へゆうれいもかんしやくやりこめた。○へあしたから道中がなるものか。△あほらしい。旦那もよひ加減にちやらつきなされ。○全たい是が附ものとは、井戸をぼろくそにしたやうな。△へさりとは旦那州チャラやしきじや。

ふたつ玉

△むす子

○母

□医者

へかげ一ト口じやうるり又メリヤスものまね。ヨウ／＼。○ほんにお隣は年酒じやといふて賑やかな事じやが、こちの子は何をして居るのじや知らん。昨日おもやのおせちにおいて夕部も戻らず。今朝から待て居るのにまだ戻らぬが、おゝかたお店のがどこぞへ連れてお出なされたのか。但しはどこそ悪ひのじやなひか。親といふものは案じるものじや。△母者人、唯今帰りました。○ヨ、よふ戻つてたもつた。夕部から案じて居た。どこも悪ふはなかつたかや。△いへ／＼。昨日おもやの御馳走で喰た程に／＼御家例のすましの雑煮餅、五つづゝ入て六ぜん喰て、夫から酒のんでめしを喰て、しかも蠣汁五膳かへて、二ぜん目から蠣は入てなかつたけれど、大根ばかりの汁吸ふて、サア腹

が大きなつた／＼。モウなんにも喰ふまいと思ふて、おもやをお暇申て戻り掛に裏町の友達のところへ寄たら、よひ所へ来た、飯を喰んかといふたよつて、また浅草のまき鮪二本ほど喰たら、サアおなかぐいたんできてたまらぬ。酒の酔は出るし、ゑらふ術なひといふたら、今夜は泊れと云よつて夕部は友達の中で寝て、今朝も二日腹で工合が悪ひけれど、マア帰りました。○めつそふな。其やうに喰といふ事があるものか。たしなみや。お医者よんでこふか。△いへ／＼、夕部裏町で医者どんに見て貰ひました。今もまたよつて来ました。追つて来てござります。○フウ、そんならもふお出なさるか。我身も嗜んだがよひぞや。其様に物喰たらどこぞでは当るはづじや。△また面白もなひ。常住そんな事いわんす、おまへ等と一口にいへるものか。若い時喰ひでいつ喰もんで。○ちよつと云と其様にかんぺきを起しやる。それもちいさる時からのむしのわざじや。内にも用の有物じや。最そつと早ふ戻つたがよひ。△サア其訳をいふて居じやなひかいな。おもやへいたらどんな御用が有も知れず。今でもおもやから呼に來たらゆかねばならぬ。おも家の御用なら二日も三日も戻られぬじやなひか。おも家持が内の自由がなる物かいな。アタヤかましい。○親に向つてけん／＼と何いふのじや。へトむすこのかたをおさへてすわらす。あいかたになる。△コレかんぺきどの。おも家／＼といやるが合点が行ぬ。何ぼそなたが以前から虫のわざでも、あんばいが悪ひと聞たら私しや狩りもするはづ。そなた先達てかね遣やつた時、親仁殿が何といわしやつた。本家しくじつた事いふたら、よもや返答は有まいがの。△何

いふのじやぞいな。人があんばいが悪ひといふて居るのに、与一兵衛も出して呉ずに、婆な事ばかりいわんす。○フウ、そんならまだ悪ひのか。腹が痛ひか。△しれた事、是見やんせ。へ身に病ひあれば、此様に五体にねつとうの汗を流し。○へ出たらめに喰過、天罰と。△へおもひ知たる折こそあれ。□へすか藪医者のおさびなり。一人母公息子殿は在宿めさるか。△先生待かねて居ます。○是は大きに御苦勞さま。見苦しひ【挿絵 五脉に熱湯の汗いさましや御輿昇】此内、マアくこつちへお通り下されませ。□へイヤくかまひめさるな。承れば親子喧嘩。何か家内に取込も有様子。△へア、イヤさゝるなる内証事。お構ひなく共先々是へ。□へしからば御免くだされふ。○申、先生さん。此子が昨日おも家で物喰ひ過して、それで腹いたでござります。宜ふお頼申ます。△へさくじつ御目に懸りましたる後、食滞仕りしも重々拙者が誤り。何とぞおくすりを戴ひて早々全快いたし、明日より本家へ相勤めたき拙者が所存。あなた様の御療治を偏に願ひ奉ります。□其やうに喰たいのは全体癩のわざ。かんけじや有。

母 ○かんじや存じませんが、いやしいといふてく。△母者人、そんな外聞のわるい事いゝなさんな。□へまう以て其方日頃から達者にもなひ病人の身を持つて、多くの物をくらひ養生をせられぬだん、子を見る事、親にしかず、と母者人の眼力。ハ、天晴く。情けなきは此後むしやうに喰過たら、是非ばう食のおんつもりが出ると知らざるか。こりや癩病どふしたものだ。○へ今といふ今、親のいふ事おもひ知たか。△アタおもしろふもなひ。ふたりしておれを責る様に何いふの

じやぞいの。○なんぞいふとあのやうに腹立ます。□へそりやかんべき。親にむかふて口ごたへするは不孝不義。しばらく食をひかへたがよひ。病氣さへ直つたらこちでこんにやくの田楽さし、拙者が手料理ふるまはん。△よふ嘘をつくお方じや。おまへさん所へいつ呼んだ事がある。□へかわひても水を飲な、とは医者がいましめ。△ア、いた。□そりや見たか。へいま其方が煩ふと汝ばかりの難義ならず。老人の御心配と知らざるか。コナうるたへ者。○子供の時は此様になかつたが、いかなるがき病がとりついて、めつたやたらに物喰のじや。△コレ母者人、何いふのじや。へ近所の手前も面目なひ。私しの此腹いた飽食の、おんづもりとあれば、一通申開かん。へトこれよりシノ入。あひかたになる。□へこの後迎も気を附てたべい。△ア、いたひ。○是からたしなんだが能ひぞや。モシ先生どふ任せふ。△ハア。□だんはひ。はら帯しつかりさすが能ひ。△へハア。夜前敷医者殿の御目に懸り。□敷いしやとはどふした物じや。○傍に居なざるのにめつそふな子じや。△是は大きに失礼。へわかれて帰る裏町にてまた候や鮪でよばれ。□腹の大きいのに鮪くふといふ事が有物か。○なんぼ程くたのじや。△大きな巻鮪。へふたつ迄してやつて。□へさけ止て養生すれば。□へすしでは当らぬ大食。△へ南無三寶しくじつたり。薬はなきかと懐中を探し見れども紙入はなし。□貴さま紙入を持た事はありやせん。此位の事療治も何もいらぬ。此丸薬一つ呑て見たがよひ。□サア。早ふ呑みや。△これは妙じや。エノウ能ふなつた。□よふなろがな。○是は奇妙じや。しかし先生さ

ん、あなたマアいんでお呉なさんなへ。□いや。へいなぬ。玄伯此家にとまつて。△はたき口の養生する。○大きなこゑじや。もふ能ふなつたか。先生、コリヤへナア申、今の鮪のわざか。△唯しは腹こわり右衛門か。□へわしが療治を○せんさき直るふがな。○何でござります。□へお、かた鮪喰たむくひじや有。

水になる湯

△やとはれ女

○粹男

へかげにて、いせおんど。たいこいり、さわぎ。△旦那さん、大きに遅ふなりました。○よふ来ておくれた。待かねていた。△なんじや急におめでたい事が出来ましたそふな。モシ隣の賑やかなは何でござりますへ。□サア隣も私と同じ寡人じやが、此間伊勢参して夕部下向じや。夫で友達衆が寄て、エラ騒ぎじや。時にこちの事聞ておくれたか。△サア漸々今日うけ給はりました。あなたもお一人で御不自由なに、よふマア其やうな能ひ嫁さんがござりましたナア。○ゑらひ急な事で、四五日手前に云だして、直に今夜来るはつじや。料理はこゝろやすひ香屋へあつらへて有けれど、内の用がどのやうに有ぞ。私し一人てん。まふて居る。おまへがお出たら、味噌も摺てもらはねばならず。油もきれて有し、何からして貰ふやら、私しやなんじやうろ。ばつかりしているわいな。△そりや御尤でござります。私しもきのふまで余所へ洗濯に往て居ましたけれども、あなたの事じやよつて、断をいふてさんじました。○よふ来ておくれた。兎かく名染にしくはない。△その名染でおもひ出した。こちらの姫はどふしなさつ

た。○サイナア、売物といふものは水くさる物じや。わしが、かいが廻らぬよつて向ふから一切じや。夫で兄貴や母者人が独置たら悪ふなるよつて、早ふ女房を持したいといふて、上町に私の従弟があるわいな。夫をもてといふ事じやが、十九か廿で随分十人なみで、おとなしい者じやけれど、廓人の味知てから只の女ははまらぬじやないかいな。△サア、あなたの事ならそふじや有。しかし今度の嫁子はアリヤ大評判の娘じや。どふ云もので御相談が出来ましたへ。直応対かへ。○そふでもないけれどな。そこが妙な物じや。むかふの母親はくつと立身さす氣じやし、又なんぼも呉といふて来るそふなけれど、是迄のは本人の氣にはまらなんだそふな。△そんならあなたに氣が有のじやナア。○そこはどふか知らぬが、跡の月、堂嶋辺から五荷の荷物こしらへどりにしやうといふ所が有たげなが、向ふの息子が偏屈者で娘のはらにはまらなんだといふ事じや。△そふかいな。アノおじさんは舞もよふ舞なざる。三味線は上手じやし、そりや、あなたのやうな粹な男でなければはまりやせん。てふど能ひ女夫じや。○サア、わしもそふおもふて居る。おまへも知て居るとふり、右の姫へのつら当も有、まんざらみつとむなひかゝも持れず。アノくらゐなら恥かしい事はなひぜナア。△あなた大体お仕合せじやない。アノ娘子を念懸て居るものがどのやうに有ぞ。○そいつらが皆精おとしをるじや有ナ。しかし縁といふものは妙な物じや。△あなたにはどふぞ能ひ嫁さんがもたしたいとおもふて居たわたくしも嬉しうてならぬ。○悦んでおくれ。私もまんざら伊賀や大和の山椒売でもなし、手打連中にも入て、其楽

さん／＼といはして、さらへ講じや、拳会のと、粹の顔売たものが、まじめな嬢を持ては、友達の来たとき格好が悪ひじやないかいな。△そふ／＼。いやまた此やうに奇麗にくらして居なさつて、能ひ男と能ひ女房と一しよに居なざると、人が皆、けなりがりますじや有。ほんに仲人はどなたじやへ。○仲人はとつても附ぬ。母者人の同行の播磨屋治郎兵衛さんじやわいな。△そふでござりますか。あのお方は年寄じやけれど大の粹じや。しかし、こんな事はつかりいふて居ずに、おむしを摺ませふ。買物にも行ねばなるまい。用事を書附して置なされ。ほんに何から仕た物じや有。○この辻の東の方の両替屋が此町の宿老じや。むこふに髪結が居るじや有。呼んで来ておくれ。月代刺て風呂へ入てコヲツ。へ此ときかげより、おだのみ申ませふ／＼トつかひのこゑする。○だれじや、人が来た。鳥渡いておくれ。△ハイ／＼、なんでござります。左様なら此お手紙置ておかへり成されませか。かしこまりました。○どこから手紙が来たへ。△はりま屋治郎兵衛と書てござります。○仲人の所からじや。なんぞ今夜の点合の事じや有。大の念者じやよつて、ドレ／＼何じや。ヨミてがみて申上候。昨日は得貴意大悦仕り候。其節御馳走忝く存じ奉り候。扱又今晚御婚禮之事。先方に少々心得違之間違候間、御断申上候。私し以參上可申上候得共、御縁無之様子故、甚御氣之毒に奉存候。今日に至り変改被致候事、甚不埒に候得共、押て申候時は世間広く相成、貴公様不外聞と存候間、差控候。御立腹も察し奉り候得共、御有免可被成候。猶結納之品、私方迄帰り御座候間、後刻持參。其節万々

可申上候得共、先者右御氣之毒ながら御断迄。早々如是に御座候。
 以上。金太郎様 治郎兵衛」△そんなら何かへ、今夜来るといふ嫁
 んを今時分に変改かいな。○仲人めも仲人めじや。一向躰がなひ。△
 あんまりあきれてものが云れぬ。○けたいくその悪む。わしの事じや
 によつて隠す事は得せぬ。友達にもいふてしまふて、是が間違ふてど
 ふ世間へ顔出しが出来るもんで。△そりや御尤じや。わたしでさへ
 腹が立。○ハ、わかつた事がある。此間最一軒能ひ【挿絵 やく束の変
 がひ状や春の雨】所からもらひに来て有といふ事じやが、大かた其方
 へ遣くさるのじや有。△そんな事して濟物か。よもや仲人がだまつて
 居ますまい。○今迄おまへに隠して居たが、有やうは先の母親に三兩
 づつの養ひを遣る約束じやわいな。へこれよりやとわれおんな、万野
 の気になる。△そふかいな。アタ憎てらしい。アノ母親を貢じやん
 かいな。それに向ふから娘をおこんさん。ヨ、気の毒。おまへさんも
 アタ不自由らしい。そんな女房よしになされ。外のを呼なされ。何ほ
 も能ひのがある。私しが目利してお世話いたしませふ。○よふおもふて
 見い。こんな体のなひ状がわしが手から人に見せらるゝ物か。たいが
 い考へて見たがよひ。こりや、何でも寄てかゝつておれに恥をかゝす
 のじやナ。△御もつともじや。しかし仰山な腹の立やう。その顔
 はなんじやいな、眼を居へて。ヨ、気のどく。コリヤもふ大もめが仕
 そふな事じや。○むすめもあつちへ〇いて騒動。△あなたと仲人と
 二人の恨み。○今夜があげた。△先の名はなんといゝます。○へよめ
 たへ此ときやとわれ女、手をうつて。△チヨン／＼／＼／＼。

○あつちから幕切てけつかる。へトまたとなりにいせおんど。さみせ
 んひく。△あた面しろもなひ。また隣の三味せん。わたしはお気の
 毒でならぬ。○大かたおれが貧ぼうじやおもふて変改しをるのじや
 有か。よふ思ふて見や、何のために私しが伯父貴に銀かつてたまる物
 か。△アタあほらしい。そんな女はこつちから否じやといふなされ。
 母親がそふいふ氣質では受にくひ。あんまりあきれる養ひ遣つて
 貢じやんかいな。○アタいまくしい。へトあふぎをやふる。△めつ
 そふな。あつたら扇子破りなさつた。○鉢割のより安ふつく。コレち
 よつと脇差取つておくれ。△モシ短気な事仕ておくれなさんなへ。○
 脇差とつて呉といふのに。△どこへ行なさる。○コリヤ何でも仲人も
 一つじや。おれをだましくさつたのじや。あいつら狐じや。△エ、狐
 どんかへ。○狐じやて、狸じやて、なんと思ふ物で。へなんの
 狐。狐。なんの狐。狐。約束が違ふた。△こまつた物じ
 や。気が違ふたそふな。○なんの狐。狐。約束が違ふた。△そり
 や何をいふなるぞいな。へ合かたになる。○へいかに男が悪ひとて、
 今さら変改どふよくじや。△へよひくくく、よひわいな。○な
 んにもよひ事はなひ。△あぶなひく。○へおのれ女め、憎ひ奴。覚
 へておれよ、此恨み。へ此とき女、わきさしをもつてとめる。△モシ
 くお気は附ましたか。○よしくもふくく気は慥な。△嬉しやくく。
 私しはまたぬきなさるかと思ふて、からだがりりくふるふ市。○へ
 あぶら屋事な。△へまんの事じや、訳がわからぬ。○へコリヤ梅玉の
 仕打を似せ音頭じや。

風流俄天狗巻之三終

風流俄天狗巻之四

大三十日
 △親仁
 ○書出シ医者

へかげにて、まつや、まぐさへ、とうがいや、かみのをしき。△コ
 リヤく、皆はやふ起よ。いつじやとおもふ、大晦日じや。払ひをこ
 しらへねばならぬ。今日はちつとなとはやふ仕舞がちじやガナ。○お
 ことおほござりまじやふ。△ヲ、誰じやと思や先生、早ふお出たナア。
 ○おせわしうござりまじやふけれど、取払ひでござります故、早ふ
 から出ました。△夫じやて、あんまりはやひ。漸今起た所じや。
 へトしゆるぼうきをもつて、チトおゆるし。おまへには差合じやが、
 はき出し医者じや。○隠居はお気の軽ひ事じや。△夕べおまへの書出
 しを見たが、チト高ひじやないかへ。○イエく、とんと如才はござ
 りませんが。△ぜさいはなひか知らんが、私中散見たやうな葉呑して
 三分はるぐひじやなひか。失礼ながら三分出すくらゐなら、齋藤さん
 でも小泉さんにでもかゝつて、こちら風情が棄たんと呑たら、三分
 葉でも納められるゼナア。○それは左様でござります故、三分でも余りお
 日の葉はあの中に大分高ひ葉種が入てござります故、三分でも余りお
 影はござりません。△お影はこりて居る。店の奴等がみなぬけおつて、
 どのやうに難義したぞ。何はしかれ、お前初手は式分つといふたよ

つて方々へ引合したが、いつの間にやら式分五厘になり、近頃は三分
 になつて、それでちつと請が悪ひ。○いやもふこなたは因縁も有、御
 鼻屑でちよこ／＼おわづらひ下されますし、又余所もお引合せくださ
 れますゆへ、こなたの療治は随分念入っていたしてござりまするが。△
 念が入るか知らぬが、おまへの薬はねつから利ぬ。こゝろ安ひよつて
 いふが、全体匙が廻らぬ。○あなたは左様におつしやるけれども、此
 間もこちらにむつかしい傷寒の療治いたしましたが、すみやかに本復
 いたしました。△毎度そんな事いふてじやけれども、こちらの息子の病
 気などは、おまへの見立が違ふた。あれは湿じやはい。【挿絵 合戦
 の中をせいぼの礼者かな】ナア、お前の薬腹して居る間は耳が聞へな
 んだ。西田様に懸つてからさつぱり直つた。初手から西田に見て貰ふ
 たらよかつた。安物の銭失ひとは能ふ云た事じや。イヤ又めつそふな
 事して呉たのは、おも家のいとこの療治じや。ゑらひお前のしくじりじ
 や。医者かへてから能ふならしやつた。○サア夫が素人了簡。あれは
 治る時分で治つたので御座ります。全く其時の医者の運の強ひのじや。
 △夫も藪医の云事じやが、何は格別、お前の按腹六分は高ひ。おとつ
 いの晩杯は余ほど短ひ。三分位の直打じや。○あんまり胴欲な。△な
 んのどふよくな事がある。アノ十七日に附て有るのは、婆が腹をして貰
 ふたのか知らんが、其ときおまへ居眠てはつきり居たそふな。あれは
 式分位でよかる。○いかさま其時は外さまで酒を呼べて、余ほど酔て
 おりました。△そんな事じや。此間子供の灸おろして貰ふたら、右
 左二寸ほど上り下りが有。何じや書出しもごて／＼分らぬ附懸も有

まいけれども、皆で式朱にまけて置。○めつそふな。十式文何がしといふものを式朱。そんなむちやいふておくれ成さつてはつまらぬ。△何がつまらぬへ。次手じやよつていふが、おまへ全躰済ぬ人じや。田舎から来た時の事は打忘れて精を出さんげな。こちの取かへもどするのじや。寡人で居て其様な術なひとはどふいふ物じや。チトたしなまんせ。○其様におつしやるけれども、私も心一ぱい精出して居ります。又内方の借りは大かた済でござりますが、△何をいふのじや。済でたまる物か。そふいふあなたが横着者じや。貧ぼうする筈じや。○医者いしやの掛かけとりが夜が明るとすぐに来るといふ様な不細工な事が有物か。○それでも、節季にははやふ来い。遅ひと待兼る、とおつしやつたじやござりませんか。△誰がそんな事いふ物で。はやひて、たいがい程らいの有物じや。こなさん前髪じやとおもふてか知らんが、医者待といふのは急病の時ばかりじやわいの。へ此とき医しや、はをりぬぐ。ちやのもんつき。ひさまつのおもひ入になる。あいかた入。○医カフへア、コレ、いかにこなたが文盲な人じやて、物いふのにも相応の義利と法との有物じや。そりやもつとも私しも八年跡に下からこへ来て、西もひがしも知らぬ者を御夫婦のお世話になり裏店を借て貰ひ、夜々は四書の素読も習はず、笛ふいて按摩に行、銭の五貫も貸して貰ふた、親より深い御恩も有り、今のいゝ様あんまり無法な人じや。△医カフホウ、おいらの影で物入したを知つて居るか。すつぱりとした詰開き。筋道が立て面白ひ。おりやしる通、明盲人。学文とやらをせねば療治の仕やうは知らねども、大恩請た親方の娘子を薬違へて初

手より悪して直りそゝくらししたのはこなたのわざじやわいのふ。○医カフコレ々そりやマア何をきゝはつて埒もなし事いわしやんな。ありや私しの業じやなし。初手から悪ひのじや。△医カフエ、いわんすなしのふ。昨日おま家の噂を聞たが、たつた今も使が来て長崎のお医者に掛て能ふなつたて、お家さんからの御口上。これをそちの医者さんに遣つて呉いて、まだお慈悲なお家。内証でこなたに遣ひ物おこしやしやる心の内、有がたひやら、いとしいやら、夫にこなたのやうな荒ひ療治してアノむすめごを死したらどふなるもんで。殊にれつきとした智さんも極つて有物を。もしもの事が有て見やんせ。娘一人を棒に振たもアノ医者殿の下手な故と、一生恨み請るのがなんの手がらになる事じやぞいの。○医カフ隠居、何をいゝなさるぞいな。夫を其様に歌舞いていわひでも、大事なひ事じや。私しも大坂へ来てこの様に貧ぼう世帯しやふより、内へいんで在所住居がやつと気さんじ。腰かゝめる相手もなし、悪を勧める友もなければ、今日を真直にくらすこそ人間じや。ひどふ術なひめして榮耀仕たい事もござりません。おまへさん、私しが錢でも遣ふやうに思ひなさるけれ共、なんのそんな事いたしましやふ。是此足の垢切見ておくれなされ。三月頃の餅のやうに、ほつかくと割てあれど、このつめたいのにまだ足袋も得買ません。△医カフそふ云事か。そんなら無理もなし。こなたも国では幼少から結構にくらしてへ楽に育た人じや物。洗濯の木綿布子一つでは寒かるふ。私も是はこなたを思ふて薬でもちつとんと安ふ買て遣りたいと、道修町三界廻つて、大概な薬屋へ這入て、見た事もなし薬の直を問ふのも

皆こなたの為思ふおれの志じや。○そりやもふ、あなたの御深切、わたくしも知つて居ます。併しおも家のお家さんも能ひお方でござります。此間も左様におつしやつてござりました。へへおそめのおもひ入。アノ子の悪なつても医者どんの業じやなひ。皆わづらひから起つた事。どふぞ薬の加減をば仕て遣つていのと、へこの様におつしやつて御座りました。△フウそふかいな。そんならおまへおいゑに逢たか。そんなら最能ひ中能じや。○節季の果にこんな事いふて居るのは御互ひに損目模様。△やく立ぬ事に気もせの門松。○へ質屋こつちやつて居る内に、外へ行のが。△へよつぽどおそめになつたか。

観世水

△狂言師

○旦那

□源左衛門

へくわんじんのふ、さんじきのもやう、はりまく有。かげにてへかすみにまぎれてうせにけり。ヨウく。○何がよふくじや。とんと見へぬ。どこぞこゝらへかきあがつて見たい物じやが。へトさんじきへかき上り、こけおちる。アイタくく。△なんじや、棧じきの後か。あぶなひ事じや。誰じやく。ヤア是はけしからぬ。棧敷へかきのぼつて落た物と見へる。まんざら賤しい人も見へぬが、ヤア是は慥きのふなればの天津湯で逢ふた灘の酒造家の主人じや。けしからぬ事。どふした物じや。申く、旦那くお気がつきましたか。○ハア、随分気はたしかに御座ります。首がいたふござります。あなたはどなたでござります。△イヤ野村で御座ります。○是は先生、面目なひ。昨日せつかく棧敷の事を仰下されまされたれど、今日は抛なひ用

事が御座りまして得参らぬ筈ゆへ、お断申あげましたる所。唯今ちよつと覗に参りまして、棧敷へかき上つて此やうに落ましてござります。△お気のどくな。昨日私しが棧じきの事を申上りましたれば、とくと勘弁いたしませふと仰られましたが、全たいあなた方のお身からで、二百疋や三百疋に御勘弁杯とは、チト御りんしよくで御座ります。○イヤ全くさやうではござりませねど、実今日はいんどころなひ儀。○アイタくく。△幸の事がござります。今日は、むかふの棧じきに源左衛門が来て居られます。○今日の番組に鉢の木は見へませなんだが。△イヤそれは佐野の源左衛門。私しの申は、なんばの骨接の源左衛門が参つて居られます。この所へよんで、お療治をたのみまじやふ。○それは忝ひ。はやふお頼み【挿絵 しはん坊の謡上手や冬ごもり】下されませ。急度謝礼はいたします。△イヤ心得ました。○時に野村氏、唯今のけがでとんと首が廻りませんが、かねのまはらぬのも難儀じやが、首の廻らぬのも甚不自由に御座ります。其うへ寒けがござります。イヤナニがくやに調屋利兵衛が居まするなら、ちよつとこれへお呼下されませ。あれは此方へ出入の者でござります。△かしこまりました。へトちよつとまくの内へは入り、仕うちあり。扱旦那、調屋利兵衛にそのよし申しましたが、慥かに其灘の酒屋といふお方なら先達て大皮衣組の代銀がけしからぬ延引して、其後紅しらべ二組遣かわしました。其代銀も今に來ぬ。大払ひくせの悪ひ人で、そんなぜいらしい事いふ人じや。ほつて置いてくれと申しておりますが。○さてく薄情な人間じや。それを爰で云出す事か。其代銀は池上先生の方へ差出

して置おきましたのじや。イヤさやうな人間にんげんにはかまはずと何なに分ぶん寒さむけが御ご座ざりますが、どふいたしたもので御座ござらふ。△それはお氣きの毒どくな。私わたくしし工く面めんいたしませふ。へトうちへはいり、のしめ装束しやうそく、いしのおびをもつて出て。是これは日野ひのやさまのござります。先まづお羽織はをりをおぬぎなされて、是これをおめしなされませ。○是且これはおそれ入いりました。大おほいに御ご心配しんぱいかたじけなふ存ぞんじます。へト野のむら手てつだふて、しやうぞくをきせる。ハア、余よほどくびがいたふござります。へいたみ誰たれかある。△へおん前まえに候まへ。○へなにとて源左衛門げんざゑもんは遅おそなはりつるぞ。△イヤくおそひ事は御座ござりません。たゞ今いま参まゐられます。へトこれよりふへ大小おほいりしだいになる。源左衛門げんざゑもん出て。□へいそぎ候程ほどに。△これは先生せんせい、大おほきに御ご苦勞くろうにぞんじます。待まちかねて居おります。急いそぎ候まへと仰おほせ、其そのやうな歩あ行あやうではとんと埒らちの明あくものではなひ。□イヤ、是これは向むかふに談だん平へいの男おとこが、割わり子をひつくりかへしましたゆへめしつばが余あほど足あしの裏うらにつきて候まへ。△なるほどそれは御ご尤もつとじや。則すなはちあれにござるのが御お怪あや我ま人で御座ござります。□心得こころえました。どれく見みませふ。○是且これは先生せんせい、真平まへいら御免ごめんくだされませ。うつむいて礼れいをなす事ことがいたし悪にくひ。自由じゆうながら私わたくしの顔かほの所ところへ先生せんせいの顔かほをお出だ下くだされませ。□心得こころえました。全ぜんたいどふいふ所ところでお怪あや我まを成なされたのじや。△どふいふものは無む入いりをなされて、余よ所の棧敷せきしきへかき上あつて落おちられましたのじや。□けしからぬ事こと。いつの事ことでござる。○竜田りゅうたいまの事ことでござります。向むかふの高たか砂さの所ところへかけ上ありますと、七騎しちき落おちましたのじや。△先生せんせいを見附みつけたゆへ、呼よびに差上さしあげましたのは安達原あだちがはらじや。□ヨイく。春日龍神かすがりゅうじんしたら班はん

女直して遣ふ。△はやふ御療治をお頼申上ます。○宜しうお頼み申上ます。□イヤナニ野村氏。かやうな事を申は如何なれど、他所の御方とうけ給はりましたが、御謝礼は貴公様がお請合じやな。○御礼の事はきつと仕ります。早ふお直し下されませ。□お怪我のおこりは、か様／＼といふ事を委く御物語へ。△こゝろ得申て候。へト下手、正めんへ出て、きやうげんあひがたりになる。へさて今日殊の外大入にて棧敷上場残なく売申て候故、無理な所へかけ上られ、真此やうに落られて御座る。また謝礼の事もくちは立派に仰られ候得とも、天性吝嗇の方と相見へ候間、どふでじゝむさかろふと存ずる。其段心得候へ／＼や。□是は便りなひ事じや。○イヤ／＼、あれはわる口で御座ります。急度御謝礼はいたします。△かやうに堅なつたのには、土砂を振かけたらば、どふで御座ります。○イヤ／＼、私は経宗でござりますゆへ、それにはおよびませぬ。□斯ふいふ怪我人は板で鉄ねばならぬのじや。○イヤそれは御免下されませ。△何ゆへでござります。○されば、板で鉄んでは人が線香かとおもふと悪ふ御座ります。□あほらしい。時に野村氏、すこしお手伝下され。へトこれよりやうぢ。のどへくすりをはる。いよ／＼くびがまはらぬてい。○さて先生、あたまが寒ふござりますが、何ぞかぶりものはござりますまいかな。□幸ひ／＼。私しの頭巾、是をおかぶりなされませ。へトくろちりめんのかぶまきをさせる。○少く／＼頭痛もいたします。△先生の御薬箱の銅じめ、御拝借いたしませ。へトもへぎきぬさなだにてはちまき。うしろにてくゝる。ゆやのシテになる。○是はかたじ

けなふぞんじます。併しかふしては居られまひ。じつくり立て見たふござりますが。□わたくしお手を取ませふか。△兩人して手をとつてお立せ申ませ。○そろ／＼歩行て見たふござります。□お鼻に疵が附てござりますな。△めつそふな事じや。どこでお打なされたのじや。○怪我はあちらのはし柱。△立ていたむ首の骨。○へはなやあらぬ初桜の。□鼻はなひやうには成りやませぬ。△はやふ直すじやうはござりませんか。□へきうに直す仕様がある。○へみなみを遙に眺れば、大悲応護の薄がすみ、湯屋権兵衛へいそぎます。□湯屋権兵衛へ急ぐと仰られても、其足元では歩行れますまい。誰ぞ人をお雇ひなされませ。△それ／＼誰ぞ頼ませふか。○へたゞたのため、たのもしき。△たゞでは頼まれませぬ。銭やらねばならぬ。□それもちつと気をおはりなされませ。○へはるもちのたぎさかり。へこれよりシテまひになる。あるきにくひこなし。△ア、いふ足元では附あふて居られる物じやなひ。私はモウ帰ります。モウ昼じや。ひだるふなりました。□めつそふな。貴公よりは私がかへる。△お医者をいなしては、コレ／＼先生。へトこゝにて源左衛門くすりのばしにて、二本つかふてたいこになる。ゆやのまひにたいこはなけれど、きやうげんきぎよにて。□先生れつくてん。イヤアいのふ、てん／＼。へトのむら、唐扇にてふへの見へなる。△へおいしや／＼、いのふよ。□へいのふやればやぶへ。○へおりや、いやじや。ホウ／＼ヒイ。△へヲヒヤライヒウヤ。□へひだるいヒヤリウリ。△へ昼過る。早ふいのふ。○へおいしや／＼。へかげにてヒイ。□なんの事じや。そのやうにし

たら、せつかく私しが骨折てじやない、骨接で療治したかひがなひ。
 △「いかさま勸進能くすりが利ひでは、らつぷもなひ物じや。○へこ
 リヤ二人して私しをゆやがらすのじやナ。」

浮世からくり

△敷医者

□女房

○坊主医者

へふくろだなつきたんすをめうとしてかたげ手にふまへ、しやうぎ・
 かなだらいをさげ、よぬけのてい。□「ヨイくくくヨヤサノサく」。
 △これはどふ致したものでじや。静にいたせ。同じ夜ぬけをいたすとい
 へども、医者の夜ぬけといへば少しく行義も有べき事じや。夫に何ぞ
 や。砂持同様にヨイくくくヨヤサノサ杯と俗言を吐事は如何いたし
 た事じや。外聞傍くたしなましやれ。全体この転宅いたす事を、手
 前兎やこふおもふ事はなひ。既に唐土の孟子の母は、三たび隣を
 といふて、数度宿がへをした人じや。□夫は私しも聞て居ます。我
 児に近所の悪ひ事を見習はさぬやうに、宿替を仕なさつたのじやない
 かいな。△サアそこじや。此方はまたわが悪ひ事をするのを、近所の
 人に見習はさぬやう、此方から立退も、是仁の道に當るのじや。□あ
 ほらしい。人に損掛て仁の道でも有まい。△サアヨイくくく。□ヨ
 ヤサノサヨイくくくヨヤサノ。△是はしたり。また大きな声をいた
 すが。□それでも拍子どらぬと重たひ物。△何も夜ぬけに拍子どる事
 ない。□夫じやて、度々する夜ぬけじや物。△いくたび致すもので
 漸此たびが。□七へん目かいな。△其かわり医者の修行より夜抜の
 修行がたつて有。□「ヲ、しんど。△是はしたり。またこゝでおろすか。是

から五六軒目が此方の米屋じや。跡の節季にも、かしましくのゝしつ
 た奴じや。アノ米屋めは薄情な奴で、僅三節季ほど滞ると火のつくや
 うに催促いたす。田夫・野人心外なれど、此方も錢払はぬ故、止事を
 得ず了簡いたし居る事、手前もぞんじて居じやないか。□それでもひ
 もじうなつた物。△情なひわるじや。出立をしたゝか喰ふたでなひか。
 □なんのゆく先も分らぬ夜抜に、祝ふ事もなひ。夫に優長らしい仕舞
 を舞ふたり。家主の丁児が覗ひて居たので、私しは怕りした。△聊の
 事に心勞する事はなひ。大功は細瑾を顧みずじや。□全体おまへはか
 いしやふのなひくせに、肝の太ひ人じや。△この婦人はまたしても夫
 を恥しめるが、既に貝原先生の女大学にも女はかたちよりこゝろの勝
 れるを以てよしとする。先手前の形相は鏡を見て知て居るで有。こゝ
 ろばへは卑しく、殊に大食で、当時米穀高直の折には甚だ困つた女な
 れども、やむ事を得ず、つれ添おるのじや。□何の其様に恩に着せて、貧
 ぼふ世帯をさして貰わいでも大事なひ。△ハ、大事の「挿絵 闇がり
 へ逃まはりけり蛍売」物を失念いたした。□なんじやいな。△傷寒
 論の本。僕がほね折て書入いたし有大事の書。残念な事いたした。□女
 何のおまへの書入した本が何になる物で、ほんにおまへのやうな流行
 ぬ医者に添ふて居るのもわしの因果じや。△こいつがく口が過るが。
 唯今にても暇がほしくば遣すけれど、太公望の妻のやうに後悔いたす
 で有ふぞ。人間は兎角窮する者には実情の有物じや。金銀を貯へんと
 する時はかならず非道なるものじや。故に聖人も富んとすれば仁なら
 ずと仰られた。金銀は世界の廻り持じや。きなくおもふ事はなひ。

□女 あほらしい。いつ廻り持になる事じや。やど替の荷ばつかり廻り持して居るのじや。へ此ときぼうずいしや、しりからげ、てうちん手にもつて出て▽ヤア見附た▽。コリヤどこへ行のじや。△是先生、面目次第もない。□女 ほんにお気の毒な。○何じや、気の毒といふ事知て居やしやるか。余り其方が窮するを不便におもひ、取かへ遣した金子も有。また其上に貸ふとんの出入までおれにかぶせ、朋友の信義もおもはぬ人面獸心といふは、手前達の事じや。△重々御尤。誠に朋友の御懇情、叟而足下の恩を知らぬといふ様な。□女 朋友こゝろでも御座りまさねど、兎角医者が流行ませぬ故。△不実とぞんじながらおこたへ申さず此転宅。○能口な事ばつかり。そんなら先途此筆筒を買ふたのまからくりじやナ。其訳有様にいわつしやれ。マア何角なしに此たんすは銀の代りにおれが望じや。へトくわんをもつてのぞきのみへになる。▽女 訳をとつくりいひなさいナア。へ此とき、いしやふまへしやうぎにあがる。口上▽△へまづ最初、おまへに借ましたるやりくりは忠臣蔵は第七つ屋質、おきちやら場の段、人をだましなよりは壹歩半月を切たる崩し利足。□女 かりの有うへにおかるこの延かゞみ、夜目遠眼なり、気性もずばら。△へ錢の手段に九太夫が、くりおろす不義利月影に。○何じや崩しを月掛にする。そんならおれが預て置た物も、わやにするのじやな。□女 口上 へこれよりは方々でかつた川、貧苦の柵一文なしのひつてんテレン▽。負ばふの道行▽。△へおはんを背中に長右衛門。爰は三条愛宿道。○だれが判する物で。加判を背おふて難義して居るのはおれじや。三条あたご道と云から、生

れ故郷の信濃の国へいぬるので有。△^{医口上}これより引越しますれば、信濃の国の善光寺。へ此ときぼうずいしや、あふぎにてかなだらいをぐわんくく。□^{医口上ほんどう}本堂は三十六間四面。朝七つ時よりあまたの借錢乞が寄集りますれば、とふく没落国。△^{医口上あつた}預りのかねまで手が届きますれば、外よりせり立、さらば欠落く。○^坊チヨコザイナ。見附たら欠落さしてたまる物か。□^女おまへさんもこつくと其やうにこつきくわす事はなひ。○^坊いふたらどふした。△^医そふいわしやれば、此方もこしを居へる。お手前のやうに高歩をせまる了簡と、此方の心底とは大ひに相違じや。○^坊なにか相違じや。□^女またこつくといなさる。△^医相違の訳を。○^坊つけたまはる。△^{医落合}こつきさんと出奔ほど違ふ。

風流俄天狗卷之四終

風流俄天狗卷之五

ぬかに釘

△力弥

○由良之介

へちうしんぐら七つ目まくあけ。はなにあそばくおわる。すぐにへかげうた。ちよはよよになる。○^{由カフク}へア、酔た。誰有ふ由良之介ともあるふ侍が、大事の刀をわすれて置た。ちよつと取て来る。其間に掛物もかけかへて、炬の炭もついでおきや。それく、三味線を直しておかぬとまた近眼が踏折ぞ。酔た。御免候へ。たわい。

へトよこになると、かげにてじやうるり。月のいり山しなよりは一りはん。いきをきつたるちやくし力弥。うちをすかしてしやうたいなき父のねすがた。おこすも人のみちかしと、まくらもとにたちよつて、くつわにかわるかたなのこいぐち、つばおと。○^由シイ。へシノ入。あひかたになる。ゆらの介おきてしおり門へくる。しじう兩人ともカブク。○^{由カフク}力弥、鯉口の音ひぐかせしは、急用ばし有てか。△^{カフク}へア、唯今母人お石様より急のお飛脚。密事の御状。○^{由カフク}シテ外に口上はなかつた。△^{カフク}かけとり米屋茂右衛門。○^{由カフク}シイ。ホケ大きな声じやな。外分が悪ひ。へひそかにく。へト兩人内へはる。△^{カフク}へア、掛とり米や茂右衛門。近々丁内へ引合を入、出訴に及ぶとの事。夫ゆへ委細はお文との御口上。○^{由カフク}よし。シテ外々は大体得心してんだか。△^カとんと得心しません。おとつさん、あなたもどふよくな。節季になると内を出かわして、母者人や私しに断をいわして、五貫や七貫の錢をづはなかけておつしやるけれど、子供や小奴のかけとりは、いんでそふいへと、はり返くわしていなしまするけれど、主がじきに來て催促します。別して薬種屋治郎兵衛などやかましよういまして、晦日じや後宴じやのと、いつ埒明ておくれなさると、わめひて居ます間に、段々掛とりがつかへて七八人居催促してあります。マアくあなたか戻つて訳をお立なされませ。○^由そふいふあほふじや、節季の断といふ物は、あるじが掛取と向ひ合してはいへるものじやなひ。そこが嬢のこふばいで、ちつとこちらから來るのが間違ひましたの、過てから手前のが參られます杯と、ちやらくいふていなすのは

臨氣応変といふ物じや。ちちのお石はかたひばかりで、とんと貧ほう
 人の嬬には間に合ぬ人間じや。そちも母親に似て断いふ事が多らい下
 手じや。△そん【挿絵 出這入の月は詠めの性根哉】な事上手なが、
 ろくな事か。○時にこの書出しに、肴や喜多八の方になんじや分らぬ
 品が二色あるといふのは何じやぞ。△夫でござります。肴やの書出し
 酢蛸一鉢、鶏の鍋焼、この二色とんと覚が御座りません。殊に日附
 は十三日。御主人判官様の大事の御速夜でござりますゆへ、覚はな
 ひと申ましたら、喜多八が申まするは、是は九大夫様とお割合で此一
 力へ持て参じまして、旦那が御存じやと申て居まするが、あなたお覚
 が御座りますか。○覚が有／＼。それはいつぞや九大夫と此一力へ呑
 に来た事がある。そふじや、十三日じや有た。九大夫がおれを困らそふ
 と思ふて蛸の足を肴にはさみおつた。其時おれがかふいふた。へ手を
 出して足をいたゞくたこ肴。へ賞翫いたすと何気なく。△ツウン。
 ○へたゞ一口にポイと喰て仕まふた。其時の蛸じやある。しかし三匁
 八とはチト高ひものじや。△めつそふなお方じや。○夫からやりしめ
 て肴の小言いふて鶏しめさして鍋焼さしたはな。覚がある／＼。△そ
 ふいふお方じや。内はしまつぱつかりさして、菜に油揚入てたひてお
 け杯といゝなさつて、余所ではつかり独り味ひ物喰て、大ていどくし
 やふなお方じやなひ。割合なら九大夫さんの方へとりに行ませふか。
 ○イヤ／＼もふ其割合はおれが取て遣ひ込でしまふた。ヨ、それ／＼。
 富の札買た。△そんなやくにも立ぬ事を仕なさる。○この八百屋重太
 郎の書出しにも分らぬ品が二色あるといふ。是はなんじや。△それで

御座ります。八百やに橙と蕪と二色附て御座ります。正月にもならぬのに橙買ふはづもなし。また蕪は下女のりんが霜やけにでも附たのかと尋ねますけれど、あれも覚なひと申て居ます。是はどふした物でござります。○是をお石が忘れて居か。覚のわるひ奴じや。それは彼のカクイ、伊勢の大夫から青海苔を貰ふた礼にだい／＼かぶらを遣たのじや。△ややくにも立ぬ物遣たものじや。○かたなや弥五郎に銀三兩とは何の代じや。△それは先日あなたが此一方にかたなを忘れてお帰りなさいつたのを翌日藤七が持て参りましたゆへ、念のため改めて見ましたらへさて錆たりな赤いわし。余まりみつともなひ故、磨しに遣ましたのじや。是は義理がある。払ふてお仕舞なされませ。○何の役にたゝぬ事する物じや。此腐た魂しる顔のよこれついでじや、断云てしまへ。△それでもむかふに聞ません。マア／＼お帰り成されませ。○へ何さま此状の文体では掛とりの得心せぬ様子。うか／＼とはして居られぬ。△何いゝなさる。迎ひの駕杯とせいらしい事おつしやるけれども、駕籠の平右衛門にも三十貫も有所。沓文もお遣りなさらぬゆへ、腹立て使いふてやつても人もおこしませぬ。其うへ下女のりんが給銀廿匁かして呉と申ておりますのをおかしなさらぬゆへ、先の季は隙くれと申て居ます。あれいなしては私しも不自由な。紫のはふかむりして、油揚二つぐらゐ買に行れる物じやなひ。どふぞしてお遣りなされ。○ハテ扱かいしやふのなひ。そちの風俗は何じやいな。御曹子の水道へはまつた様にぞべ／＼と其はふかむりも紫の色のさめたのは、いけ

た物じやなひ。百か百廿出して新し手拭買ふてかぶつたがよひ。△そんな事いわずとちよつとお帰りなされませ。○へしからば罷り帰らふ。最早当所の見納め。明日は泉州堺へ夜抜して、夫より直さま江戸表へ出奔せん。へかげより、由らおにやまたい／＼といふ。△由ら鬼はまたいか知らんが、かけとりのおにはどのやうにきびしいぞ。○由らイヤ／＼。あれはおれが余り長座する故、由ら鬼は長ひといふのじや。△其やうに疎まれて長居せずに、サア／＼はやふお帰りなされませ。へかげにて、とらまよ／＼。△とらまよふと申て居ます。捕まへられぬ内に早ふお帰り成され。○へだんない／＼。捕まへたらかね払ふ。△ぜい云ずにお帰りなされ。へト手を引ばる。○力弥コリヤどふするのじや。△へゆらおにから武士引ずり出すのじや。

尾上の影

△むすめ

○聒

□仲人

△正めにびやうぶあり。かげにてゆきのうた。△お隣へめがねさんが来て歌を諷ふてじやが、ほんに能ひ声じや。アノ歌の通、聞も淋しき独り寝といふは私の事じや。世の諺に四百四病のやまひより、貧ほどつらひ物はなひといふのは裏腹なこちの内じや。とゝ様が銀をたんと延して置ておくれた故、かゝ様も私も安楽に暮して居るけれども、つまらぬはわしの病ひ。人にも云れぬ業病じやよつて養子しやふといふても聞合されるとみなじやみてしまふ。夫ゆへかゝ様はせんどからわしの病氣の心願のために西国して、わし独ほつて置て有のも、男でもこしらへたら幸ひじやと思ふての事じや有ふが、若いおかたも

大分遊びに来てじやが、とんと私しの気にはまつた人がなひ。わしもまたまんざらな男は否じや。二通なら俄でもするといふやうな粹な男が持たひけれども、有は否なり、思ふはならずじや。□どふで御座ります。すつきり得お尋ね申さぬが。△是は伯父さん、よふお出なさつた。マア／＼お上りなされませ。□私も先途から頼まれて居る事が有て、ちよつと来ふとおもふても聞しうて得来なんだが、母者はどこぞへ行れたかな。△ほんにあなた、いつぞやからお出なさらぬ内に、かゝ様は遠方へいかれました。□ハアどこへ行れたナ。△サア、お前さんは前からのお名染ゆへ隠す事はなひ。私しの病氣寝入ますると此首が長ふ延ます。□サア／＼それが母者の苦じや。爰の親仁が銀延して置いたのはよひが、おまへの首のびるのは難義な物じや。△親といふ者は因果なものじや。私しの病ひを直して遣りたいといふて、其心願でかゝさんは先日か西国に出られました。□そふかいな。夫は結構な事じやが、いつ頃戻つてじや有ナ。△サア出た序じやよつて西国から四国へも廻つて、ついでに地獄の方へもいて七月の十六日に釜の蓋の明のを拝んで来るといふて出られましたよつて、どふで戻りは遅ふなりませ。□そふかいな。わしの来たのは別の事じやなひ。母者が兼て頼んで居られた爰の養子の事をいふて来たのじや。△それはマア御深切な。いやもふかゝ様は留主でもよひ。養子が有たら私の勝手次第にせいといふておかれしました。□フウそふか。粹な母者じや。そんならお前に直応対にじやふ。爰へ世話じやふといふ養子は、商売を覚て居る人でなければ役に立ぬよつて、私も骨折て探したが、幸な事

が有て呉服屋に長ふ居た人で其道には大のくろとじや。其かわり色も黒ひけれ共だんなひ男じや。日を見て見合をさそふか。△めつそふな。お前さんのお世話なら見合にも及びませぬ。どふぞ今夜でもつれまして来てお呉なされ。□そんならそふしても大事ないか。△大事ない段か。私し独で淋しうてなりませぬ。今夜から泊つて貰ひます。□表向のひろめは母者が戻つてから。そんな【挿絵 此人にこの病ありふぐと汁】らいんでつれてこふ。△そふしておくれなされ。併し私しの首の事いふてお呉なさんなへ。□めつそふな。首の事、頭からいふてたまる物か。てふどおふたり叶ふたり。爰の内には上養子じや。△上養子の足の早ひのが能ひ。はやふつれて来てお呉なされ。□合点じや／＼。へトなかふどいぬる。あとにむすめすてぜりふいろ／＼有。△ほんに嬉しい事じやが、きのふ髪結さんが来たのに、結ふて置たら能かつた。急な事じやよつて撫付けて置ふ。へトかゝみたて、かゞみでだす。ほんに隣へ来て歌うたふたお方がいま諷ふて呉てじやと髪無つける間の独吟に、てふどよひのに。○ほんに縁の障子をしめると聞し、明るとさむし。へ風といふ男になびく柳髪へ此うたをきつかけに、なかうど、むこをつれておもてへ出てくる。すてぜりふいろ／＼。○お前の世話じやよつて聞合もする気はなひが、ぜんたい合点の行ぬ事は、銀がたんと有てよひ娘老人はつて置て、勝手次第にさして有といふのはどふいふ物じやいな。□サア、それは入込だら訳が分るといふ事。悪ひ事はせぬ、私しにまかして置。もふ爰じや。アレ／＼娘が髪無附て居る。ちよつと覗ひて見い。どふじやよかろがな。○何じや、

けつたいな顔じやな。としはいくつ位じやへ。□榎十九か廿歳かじや。
 ○あほらしい。なんの十九や廿といふ事が有ふ。なんぼ若ふ見ても五
 十からじや有ふ。□そりやおまへの眼が悪ひのじや。何はしかれ、気
 に入ねば戻つて来るぶんじやないか。サア〜這入。コレ〜もふ来
 てじや有たぜ。△来てと御座りましたかへ。どふやら恥しうて小便が
 したふなつた。□マア〜小便は跡へ廻し、サア〜這入〜。へ此
 ときむこはいる。むすめもはづかきこなしにて、兩人たがひにかほ
 をそむけてすはる。□コレ〜、其やうにして居ずとはやふ挨拶を
 仕いんかいな。△ハイ〜是はあなた、よふお出なされました。○へ
 イ今ばんは。余ほど寒ふ御座ります。□そんな事いふて居ては始らぬ。
 かふしやふ。へトむすめにさゝやく。むすめはづかしがるをむりにお
 くへをしやる。またむこもおくへゆけといふ。これもてれるこなし。
 むりにおくへやる。□ヤレ〜世話な事じや。ドレマア一ぶくしや
 ふ。おかしい物で氣に入のいらぬのといふとも、一度寝さしさをやる
 と大体納る物じや。時に私が骨折のも盗人の昼寝じや。爰の内に大
 分銀が有よつてまさかの時に借ふといふやつじや。兎角まかぬ種はは
 へぬじや。へ此やうなすてぜりふある。うしろのびやうぶの上へ、む
 すめのくびドロ〜にて出る。はじめの間、仲人しらぬ。△伯父様
 誰じやいなへトうしろむく。くびを見て□エ、情なひ。か
 ねて聞て居るけれども首の出たのは始めて見るが、心よふなひ物じや。
 何しに出ておいでたぞいな。△伯父さん、能ひお方を世話しておくれ
 なさつた。打解て咄すると一向深切なお方じやわいな。□サア〜よ

ひく。マアく寝所へ行。翌日じつくり来て聞わいな。△いゝへいなア。今ちよつと休んでじやよつて来たのじや。最前からもふ二つしてじや有た。□なんじやいな。女子だてら二つの三つの手でなとして見せひナア。△手でして見せたいけれども、手は寝所に有わいな。□ア、情なひ。マアく寝所へいんでおくれく。△そんならまた跡で来るはへ。□最ふ来いでも大事なひ。へ此ときドロく。むすめのくびきへると、むこおびとけひろげ、ねぼけたるこしらへていで。○もふいにたか、仲人さんく。□なんじやいな。○アノナ、かわつた事が有。娘と並んで寝て居たのに、いつの間にやら娘が逆さまになつて、どちらが頭じややら足じややら分らぬやうになつて、とんと合点が行ぬ。□何を寝とぼけていふのじやいな。早ふ寝所へゆかぬと娘の気がわるふなるといふ事。○それでもなんじや気味がわるひ。□そんなこといわずにはやふ行く。へトむりにおくへやると、またドロくにてびやうぶの上へくびがでる。△伯父さんく。□ア、情なひ。またお出たかいな。何じやいな。△あした御近所のが問ふてじや有たら、在所からのお客じやといふて置ふかいな。□マアく、咄はあした来てするといふ事。いんでおくれく。△アノお方は黒ひけれど味の能ひお方じや。□サアく能ひといふ事早ふいにく。へドロくにてむすめのくびきへると、こんどはむこじゆばんふんどしにてきものをだかへ、おくよりとんででる。△申くどこへ行なざるぞいなく。○仲人はどこにじやいな。あた気味の悪ひ。こんな所へ人を世話するといふ事が有物か。首のなひ娘見た事がなひ。□へ

ほんに貴様も鹿相なわるじや。へろくく首聞合しもせず。△へエライ智見ずなお方じや。

鬼やらひ

△坊主医者

○息子

□米屋

へかげにて、ほんげう、四ばやし。△うら町の小松原は小鼓において高名の人。殊に門弟は多し。其弟子といふのが皆おやしき方や富家の主人。結構な物じや。あの人も先生、わしも先生く人とはいふてくれるけれども、此方の先生は先生といふて灰吹捨にやるといふやつじや。全体敷医者といふ名を取と何となふ人があなだる。其くせ何にも知らぬわろが乗物に乗歩行と上手かと思ふて居るのが素人了簡じや。いやまた此方どものやうに治療に骨折て行はれぬといふは、所謂孔子も時に合ぬといふので有ふ。○御免下されませ。先生御在宿で御座りますか。△是はく能ふお出。先々是へお通り。○御免下されませ。イヤ早速ながら親ども左様に申されませ。手前の病人も段々先生の御苦労に預りまして先日からお薬の四五十貼も呑しましたれど、少しも利ませぬ故、今朝一家共から小泉さんに見て貰ふたが能ひと申まして、則別駕籠で御願申あげました所、あなたの御見立の事も申まして、お薬もお目に懸ました所が、以の外、御見立が違ひまして是は温疫じや、此やうな療治では迫付死ると仰られますすゆへ、皆大に驚まして今日から小泉さんの御苦労に預ります。夫ゆへちよつとお断に参りました。子供をおこしましては間違ふてはとぞんじまして私が参りました。△是はけしからぬ。いかやう共成されたが能ひが、私しの

療治で御病人は追々御全快の方じやが。○ねつから能ひ事はござりません。段々悪ひ方で御座ります。咳が出ます、痰が出ます、何分術ながられます。△何も驚事じやなし。咳が出て痰が出るのは当りまへじや。咳痰十郎といふて江戸杯では行はれるものじや。○此間も逆上ますゆへお加減をなされ下されませと申たのに、逆上は下らず腹が瀉るやうになりました。△それも有事じや。最上川のほせば下の稲舟のと古人もいふておかれた。併マア小泉がそふいわるゝなら、先小泉にお預なされたが能かるふ。実此方も病家が多い故、遠方は断いふて居る。○向ふから断でござりますか。△めつそふな。イヤモウあぢいな物で、此頃もあの通の病人が有て吉益が廿日ほど療治して居られたが、とんと直らぬ所を一昨日から私の薬三貼のますとぐつと能ふなつて追々全快の様子じやが、妙なもので乗物が利やうに思ふのは素人了簡じや。○先生折々左様のお咄をうけ給りますが、あなたは口は能ふ廻るけれども、匙は廻らぬといふ評判で御座ります。△イヤサそこが千差万別で、此方只今病家はすくなひけれども、五十七八軒跡の間も薬礼八十両ほど取ました。○イヤ夫に附まして親ども左様に申されます。先達ての頼母子はどふなりました。掛ましたなりに三年の余にもなりますが、何の御沙汰もないがお尋ね申て見いと申されました。△成ほど。あれは連名の内に少々故障がござりまして算用が間違ました、イヤとくと調べて跡より書附を差出させよ。○いつぞやお尋申た時も左様に仰られまして夫なりでござりました。△イヤ心得ました。全体私は金銀の出入を速にいたすが大好で御座りまして、節季

など掛けとりを二度と足を運ばせませぬが仕似せて御座ります。○ハアあなたが。△このときこめや、しろまへだれにて、てうさいふもち、こしにこめさしをさし、かけごひのなりにてはいろふとする。いしや、せきばらひする。とんででるうちにすてぜりふあり。またはいりかゝる。せきばらひ。とんででるうちにせりふあり。こんどおもひきつてはいる。○おゆるし下されませ。橋屋で御座ります。△フウたちはな屋か。いまチト客を得て居る。追てこの方から沙汰をする。○なんにも沙汰はして貰らわひでも大事御座りませぬ。今日は錢を貰ふて帰らた御座ります。△イヤ一兩日のうちに家来に持して遣らう。○あほらしい。家来は有もせぬもの。けらい嘘つく人じや。○あれはどなたでござります。△あれはこの方へ出入の者で御座ります。○人に錢もはらはずに出入の者も気がつよひ。○なんじや腹立て居られますが。△イヤあれが癩しやうで御座ります。○なんじや癩しやうじや。かんしやういふてか。おりや、どこも悪ひことはなし。こなたこそ悪ひせりふする人じや。△是はしたり。氣の利ぬ男じや。客があるといふのに後かた私しがそちへゆく。○なんにもおまへは来ひでも【挿絵 棚経は拝倒しの権輿かな 杜陵】大事なし。錢さへくれば能ひのじや。○これは氣のどくな。こめ屋のどふいふ出入じやナ。○どふのかふのて、下地に廿も敷がござりますのじや。夫をのみ込で仕送つて居ますのに、また新借が十七八貫。節季に来れば過てから、過てから来れば晦日、一向たいが御座りませぬ。○それは御もつともじや。先生、先刻のおはなしに跡の間も薬礼の七八十両も取たやうに仰られ

ましたが、この掛乞かけこはどふで御座ござります。△サア、七八十兩りやうほど取た
 ら能あたかるふとぞんじますのじや。○あほらしい。△わたくし懇意こんいの斎さい
 藤とうなどは百兩ひゃくらうの余取よとれます。○人の取事とくじいふて役にたつものか。△実じつ
 はわたくしも京都きやうとから当地とうちへ引越ひっこしまして、妻さいは病身びやうしんに御座ござります。
 子供こどもは九つを頭かしらとして七人。先達さきだつて痲瘡ほうそうの節せつ、四人一時いちときにいたしまし
 て一人も死ぬしといふくらゐの不仕合ふしあはせで御座ござります。有ありやうは唯今ただいま病家びやうか
 は二軒にけん御座ござります。一けんはあなた今日こんにちおことはり。今一軒いまいっけんはひがし
 裏うらに居おります。六十むそぐらゐな下駄げだの齒入はいれにまゐりますもの。薬百くすりひゃく
 貼なぐの余よも吞のましましたれど、沓文くつもんも呉くれはいたしませぬ。また薬礼やくれいもく
 れぬ所ところへ見舞みまわいでも大事だいじなけれど、そこへなと見舞みまはんと行所ゆくところがな
 ひといふ不仕合ふしあはせで御座ござります。今日こんにちお來きあわせ成なされた御ごふしやうに、
 どふぞアノ米屋こめやの暫しばらく待まつて呉くれますやう御ご挨拶あいさつさつなされくだされま
 せ。□むごふ流行はやらぬ医者いしや。ゑらひかいしやふなしナア。○御ごもつと
 もじやが、先生せんせいを其そのやうにはぢかゝす様やうにいふては悪わるひ。△イヤ／＼
 御心ごしんばいは御無用ごむよう。はちはまへ／＼かきつけております。□そのやう
 に医者いしやがはやらねば弁慶べんけいにいたらどふじや。○しかし此このやうに運うんがが
 いなふては。△ふうんな弁慶べんけいじやある。○いかさまへ先生せんせいをはぢしめ
 たてまつり。△沓文くつもんも出來でぬ貧家ひんかのことなら。□／＼なん義ぎにせまつ
 て。△へ見みへたるぞやへヒイはやふへになる。□／＼せんも／＼これ
 はへ此このときこめさし、なぎなたになる。しろまへたれ、大おほくちになる。△
 へはんぶんも出來でぬくらゐの米代こめだい。○へたいがいなら晦日つひほど。△へ
 いふていぬなり。□そんなことばつかり聞きていんで居ゐるのじや。ほと

けの顔も三度じや。○今度はよもや違やせまいナア。△どぞおがんで居る。そふいわれると私しはへじゆつなき。たら／＼あせかひて、どぞ節季にごさんせ。□へなんぼほど呉れるのじや。○へさんように大不足。△へほう／＼に此とふり遣りやせん。○へ中途には大なしげにが。△へ不自ゆうなは妙。□なんの妙なことが有て商内しても銭取らひでは一向○たいなのとも盛。アンナ人には何ゆうれいもこたやせぬ。○貴さまのが皆もつともよし経。しやふこの挨拶は。△これから現銀でなければ○うらん弁慶か。□借錢おふて居てうた話いふのは。△へよつぽど能舞台仕打じや。

風流俄天狗卷之五大尾

跋
 村上先生は浪花權屋町の人。名は甚蔵、誹名杜陵、表具師也。江戸歌鳴物流行の時、朋友の需に應じて指南者と成、天性書を好み、頗多芸也。天山老人の門弟と成て軍談を講じ、俄は幼年より其妙を得て今知命を過、一派を發明し、風流、滑稽・雅言は野村・石津を驚し、歌舞伎の趣意は梅玉を感じしむ。此妙に於て此人前後になし。我も先生の俄を見て感に絶へ、せめて其草稿を梓に為ん事を乞て成ぬ。時に先生の曰、我故人の糟粕を嘗ざれば月々の新作限なし。今爰に載する所は其十分一にも足らず。且極意に於ては筆姿に尽す事難しと有。宜也。

然れば先生の妙を見まほしき君子は、兩三日以前に案内有時は彼雅友を具して出勤し給ふ事有。好主の君子御遠慮なく招請して其妙を見て感じたまへと。

文淵堂主人識 印〔文淵堂印〕

作者 浪華 村上杜陵 印〔杜陵〕
 画 同 浦川公左 印〔公左〕
 浄書 同 加藤近張 印〔立〕

風流俄天狗二編

〈ながし俄／＼ひとりにはか〉 全部五冊 来巳夏出版
 〈天竺徳兵衛／＼虚実談〉 知恵加増歌 全部五冊 本虎著 近刻
 本朝春秋外伝 全部五冊 近刻

天保三壬辰年仲夏発

皇都 通油町 鶴屋喜右衛門
 東都 唐物町心齋橋 河内屋太助
 書林 浪花 博労町心齋橋 河内屋長兵衛
 南久宝寺町心齋橋 河内屋直助

